



行ってきました海外 体験記



テキサス大学

サマーリサーチプログラムに参加して

テキサス大学国際事務局にて
(右から2番目が筆者)



医学部医学科4年

黒川 憲 くらかわ けん

2008年5月22日から約2ヶ月間、テキサス大学(UT)ヒューストン校で毎年行われているSummer Research Program (SRP)に参加する機会を得ましたので、ご報告申し上げます。

ハリウッド映画などでよく宇宙船の乗員らが叫んでいるように、ヒューストンはNASAの宇宙センターがあることで有名ですが、実際どんな所であるかご存じの方は意外に少ないのではないのでしょうか?ヒューストンは南部最大のテキサス州にあり、気候は燃えるような快晴の日が多い反面、集中豪雨も多く、意外にも非常に緑が豊富な土地です。

また、地理的にメキシコが近いだけあって街中にはスペイン語が溢れ、タコスに代表されるメキシコ料理など、様々なエキゾチック文化が広がっていました。

テキサス大学医学部はそのヒューストン中心部から車で10分ほどのTexas Medical Center(TMC)内に位置しているのですが、このTMCは何十もの病院や大学、研究所などが融合した巨大なメディカル都市となっており、初めて訪れた時はその桁違いの規模に圧倒されました。その中で私が留学したのはUTの内科で、Medical Genetics、Milewicz教授の教室です。Milewicz先生は臨床の傍ら、主に遺伝性の解離性大動脈瘤の発症メカニズムについて研究を行っており、私も解離性大動脈瘤を進展させる遺伝因子について研究を行いました。元々30人を超える教室メンバーは非常に多国籍で、別のプログラムから研究に参加していた4~5人の学生も含めて一人一人の個性が強く、とても刺激的な2ヶ月間となりました。ま

た、Milewicz先生は現在MD-PhDコースの責任者であるだけでなく、自身も同様のコースを出身としており、教室では先生を将来像として憧れている3~4人のMD-PhD専攻の学生が、医学生としての勉強(全てe-Learning)の傍ら研究も頑張っていました。

ところで本プログラムは、元々医学部の1年次(MS-1)、さらに医学部進学を目指す米国内のCollege 3~4年次を主な対象としています。そして海外の提携校からの参加も積極的に受け入れており、今年は日本から2名、中国から3名、台湾から6名の計11人が参加しました。したがってSRP全体としては、約半数の学生がMS-1、そして残りがCollege生と留学生という構成になっています。私の英語力は良いとは言えないレベルだったので、当初は「本当にちゃんとやって行けるのだろうか?」と心配でしたが、研究室のメンバーが暖かくフォローしてくれたのはもちろん、他国からの留学生や、同じ学生寮に滞在していたCollege生らとどんどん仲良くなっていくうちに、こうした心配はいつの間にかなくなっていました。

また、研究室への配属以外に週2日、SRPの参加者を対象としたランチセミナーがあり、米国の医学教育システムの紹介、NASAによる宇宙病の講義、最新の医療

テクノロジーといった多くの興味深いセミナーが用意されていました。そして毎回100人以上いた学生はみな真剣に講義を聞いており、多くの場合、学生が様々な疑問を投げかけると共に、講師もそれに答えていくという有機的で活気のある講義

スタイルであったのがとても新鮮でした。ちなみに余談ですが、毎回のセミナーで配られた昼食はハンバーガー、ピザ、ポテトチップス、砂糖の塊のようなブラウニーといった典型的なジャンクフードです。

楽しみにしていた休日は、UTの学生やCollege生、そして現地で知り合った日本人研究者の方々などがバーベキューや独立記念日の催し、ガルベストン島までドライブ、NASA観光や大リーグ観戦などといった様々なイベントに誘って下さり、大学外でもとても充実した生活を送ることが出来ました。また、去年徳島大学を訪れたマイケルやアイザック、そして引率のクルカーニ教授らと再会することもでき、カヌーでの川下りや教授宅での和やかなホームパーティーは、特に記憶に残る経験となりました。

最後になりましたが、今回の留学にあたっては、松本医学部長、福井教務委員長、泉前教務委員長、村澤医学部長補佐を初め、チュートリアルコース長の島田教授・曾根教授・丹黒教授、学習支援センターの赤池先生、その他数多くの先生方に大変お世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。今回の貴重な体験を生かし、これから更に頑張っていきたいと思えます。